

優秀賞

杏の樹の約束

柴山 仁美 茨城県筑西市 四十七歳

「元気になったら、杏を植えよう」

去年、立て続けに大病をして、入退院を繰り返した夫が、病床で私に言った。宣言のようにも、夢を語るようにも受け取れて、涙をこらえるのが精一杯だった。今まで、病氣一つした事が無い人。

大酒飲みで、筋骨隆々だったのに、食事制限と運動制限で、みるみる重病人になっていくのを、目の当たりにしていた時に。今だから白状するけど、死ぬフラグが立った。って、本気で怖くなったんだから。

笑い話になったから許すけど、もし、今年一緒に、杏の樹を植えなかつたら、トラウマになって二度と食べられなくなる場所だったわよ。私の好物なのに。

でも、自分の好物じゃなくて、あえて杏を選んだのは、私に喜んでもらいたい。って思ってくれたんでしょ？
点滴に繋がれて、絶対安静と言われて動けなくても、そんなふう私を喜ばせようとする、その気持ち、とても嬉しかったの。

「そんなの元気になったら、忘れそうじゃない？」

憎まれ口でもたたかなきゃ、泣いてしまいそうになるくらい。一生付き合わなくてはいけない持病になったけど、退院出来て良かった。健康体じゃないけど、普段通りの生活に戻れて良かった。新型コロナ自粛のせいで、病床で約束した「旅行に行こう」も、「美味しいものを食べに行こう」も、うやむやになってしまったけど、杏の樹を見ると、

「まあ、いいか。」なんて思うのよ。

忘れてないけどね。